

アテネオリンピックの柔道を観戦して

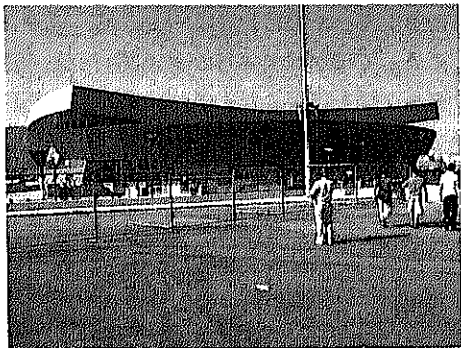
小俣幸嗣

「お帰りなさい、アテネへ」の標語のもと、オリンピックは108年ぶりに生誕の地アテネに戻り、柔道競技は開会式翌日の8月14日から20日にわたり開催された。試合はアテネ市の北部郊外に新設されたアノ・リオシア競技場で、毎日男女各一階級ずつが軽い方から行われた。

4月の男女選抜体重別選手権大会と全日本選手権大会において、昨年の世界選手権大会における覇者、井上康生(100kg級)、鈴木桂治(+100kg級)、谷亮子(48kg級)、上野雅恵(70kg級)、阿武教子(78kg級)ら5人の世界チャンピオンをはじめとする代表選手が選考された。

好成績が期待される選手団は、前回シドニー大会の金メダル4個を上回り、全員がメダル獲得することを目標に掲げて乗り込んだ。

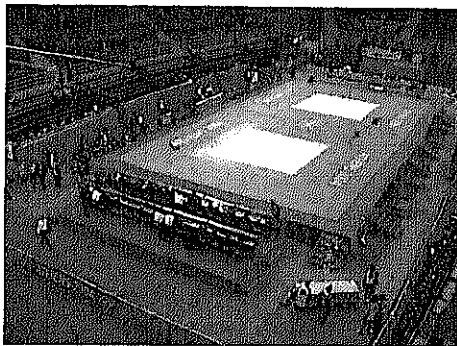
日本からギリシャに入るには、欧州主要都市からの乗り継ぎが不便で、各地で数時間の待ち合わせが必要だったようだ。通常欧州は日本を朝発つ場合が多いが、それだと到着は深夜になった。



会場外観

1 会 場

アテネ市郊外にある競技場へは地下鉄とバスを乗り継いだり、中心街から40分程であった。周りは砂漠で一件の店もなく、入り口で手荷物検査を受けて会場に入った。オリンピックの通例で、正面にあたる場所は一面テレビ局が陣取り、観客は向こう正面あるいは横から眺めることになる。館内は、テレビを意識してか試合場の外側から壁、床にいたるまで明るい薄水色に統一されていた。



試 合 場

選手の対戦は、天井から吊された小さいものと壁に掲げられた大きな電光表示板から知ることができた。審判員の名前や国名も出るので分かりやすい。プログラムにあたる対戦表は、他競技も含めて毎日発行され、一日ごとに5ユーロ(約700円)で売られていたが、特に記録を取る必要のない筆者には不要であった。

試合は、予選が10時30分から2時頃まで、午後の決勝ラウンドが4時30分から6時30分

頃まで行われた。夕刻の開始が過去の大会よりも2時間ほど早く、おかげで試合後の食事でもレストランへ出かけてゆっくり楽しむことができた。

入場料は午前が25ユーロ(約3500円)、午後は40ユーロ(約5600円)であり、すべての日程を見ると6万円を超えた。会場では、柔道人気の高い欧州での大会とは思えないくらい空席が多く、欧州人も少ない気がした。知り合いのオランダ人コーチは数日間の滞在だと首をすくめていたが、通常の20倍と噂されるホテル代のせいだとしたら、残念なことである。

2 試 合

開幕初日から、予想に違わず谷亮子(48kg級)が2連覇、野村忠宏(60kg級)が3連覇と、二大選手が偉業を達成し、突破口を開いた。さらに野村の金メダルは、日本人通算100個目の記念すべきものとなった。

会場は欧州であることを忘れさせるほど、日本人応援団で埋め尽くされた。揃いのはつぴ姿に日の丸が乱舞し、熱狂的ではあったが、どこかに楽観ムードを感じた。二日目も内柴正人(66kg級)、横沢由貴(52kg級)が順調に決勝進出し、内柴が世界選手権、五輪を通じて初めて世界の頂点に立った。

しかし、この勢いも三日目は動きが止まる。高松正裕(73kg級・筑波大出)は現地で高熱を出すなど体調不良で力を発揮できず、日下部基栄(57kg級)も攻撃に勢いが見られないまま敗退した。四日目の塘内将彦(81kg級)は組み手にこだわり、思い切った技が出せぬうちに内股を返されて終わった。

対照的に、谷本歩実(63kg級・筑波大出)は思い切った技を仕掛けすべて一本勝ちで優勝した。続く泉浩(90kg級)は積極的な試合運びで決勝に進出し、大外返に敗れたが立派に銀メダルを手にした。上野雅恵は実力どおり着実に勝ち上がり、金メダルを獲得した。



表彰台の谷本選手

毎日、日の丸があがって勢いづくなかで登場した日本選手団主将の井上康生(100kg級)は、3回戦にオランダの選手に背負投で投げられ敗退した。さらに、敗者復活戦でも大内刈を返されて一本負けしてメダルに届かず、会場全体に衝撃を与えた。初戦が鬼門だった阿武教子(70kg級)は、強豪フランス人選手との延長戦も制し、決勝では乾坤一擲の袖釣込腰で三度目にして初の金メダルを手にした。

日本の勢いは最後まで止まらず、最終日の塚田真希(+78kg級)は、決勝で「技あり」を取られてからの「抑え込み」をも逃れ、逆に抑え返して逆転、劇的な優勝を飾った。日本選手権者鈴木桂治(+100kg級)は、大男を苦にすることなく、軽快な動きから足技を駆使し、決勝も小外刈で一本勝ちした。

会場の外国人達から日本への喝采とともに、「美しい技だ」「これが柔道だ」という声を聞いたが、すばらしい技の柔道が見られたことへの賛美だったのであろう。

こうして日本は未曾有の金メダル8個、銀メダル2個を獲得した。これは14人の代表選手で決勝に残らなかったのが4名だけ、7日間で日の丸が揚がらない日が1日だけということである。全階級制覇という言葉が日本柔道界から聞かれなくなって久しいが、復活してきそうな気配すら覚えるといっても過言ではないだろう。

3 審 判

採点競技における審判に対する問題は、永遠の課題ではないかと思わせる位絶えることがない。近年ではソルトレイク冬季オリンピックのゴタゴタが記憶に新しい。

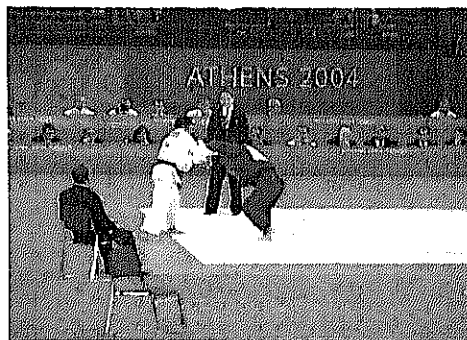
青い試合場のテレビ画面を前にして、シドニー大会の記憶がよみがえった人も少なくあるまい。とかく「外国人審判は・・・」とか「国際大会では・・・」と、ルールの運用が国内と違うという指摘が多いが、会場で見た限りでは違和感も少なく、落ち着いて試合を楽しむことができた。罰則を急がず、試合を中断させないことで、よりよい展開を引き出した審判も多く見られた。具体的にいえば、消極的柔道の罰則適用に慎重になったこと、与えるときには両者にという例が多くなったこと、寝技での攻防に時間が与えられたことであろうか。

オリンピック審判員は、世界ジュニア選手権、世界選手権を経て徐々に絞られ、アテネには女性一人を含む25人が選考された。午前中うまくなかった者は、午後の決勝ラウンドには採用されなかったようであるが、全期間、午後に全く出番がなかった審判員も数人いたという。さらに、難しい状況では審判員が審判委員会と相談したり、逆に拙い運用や望ましい進行には、審判理事のバルコス氏が審判席まで出向き、忠告や激励を与えるなどの場面がたびたび見られた。

細かいことをいえばキリがないが、こうした努力が見解の統一された審判につながり、選手達の優れた技術を引き出すことに成功したと言ってもよいのではないかと感じている。これをもって国際審判員の質が向上したというのは早すぎで、最高の場にふさわしい厳選された審判員が採用されたということである。

4 競 技

両者に明確な得点がないまま試合時間が終



試 合

了した場合には、従来、副審の旗によるいわゆる「判定」が行われていた。しかし、2002年からはこの旗判定を止めて延長戦を行い、いずれかの試合者が先に得点を上げた瞬間に、自動的に試合が終了するゴールデンスコア方式が採用された。これにより実質的に旗判定が国際舞台から消滅し、すべて技術か罰則で決着がつくということになった。

また、女子の試合時間も従来の4分から1分長くなり5分となったが、五輪での採用は初となった。

国際大会では、「一本」の決定率が約60%に達するが、これは審判員の「一本」の判定に甘さがあるという指摘も国内には根強い。少なくとも今回の試合を見れば、選手達が積極的に勝負に出て、技が決まる面白い試合展開が多くなったことは事実である。むしろ、同じ国際規定で行われている国内の試合が、緩慢に思えることも少なくない。似通った柔道スタイルが決定力を削ぐのか、審判員のルール適用が甘いのか、指導に携わるものとして考えさせられる問題である。

5 筑波大学関係者

本学からの代表選手は、今春卒業した高松正裕（神奈川・桐蔭学園高出身、旭化成）と谷本歩実（愛知・桜ヶ丘高出身、コマツ）の2人がいる。高松は調整失敗から力を発揮できず敗れ、一方の谷本はすべて「一本勝ち」

で優勝を飾り、明暗を分けた。谷本は筑波大学開学以来、男女を通じて初のオリンピック金メダリストとなった。

そのほか、最後まで代表に挑んだ選手も紹介しておこう。高松と同階級のライバルで、2002年世界選手権大会銀メダルの金丸雄介（了徳寺学園、2002年卒）は、国内最終選考会で高松に敗れチャンスを逃した。また、2002年の全日本選手権者新谷翠（ミキハウス、2003年卒）は、最終選考で塚田選手に敗れ惜しくも涙を飲んだ。

また競技役員としては、竹内善徳名誉教授が国際柔道連盟副会長（アジア柔道連盟会長）として、代表選手団では、男子コーチに岡田弘隆氏（本学）、女子コーチに木村昌彦氏（横

浜国立大学）、出口達也氏（広島大学）、山口香氏（武蔵大学）らが参加した。あわせて記しておきたい。

6 終わりに

今回の成果をあげるならば、日本が14個中8個の金メダルを獲得したということにとどまるものではない。称賛されるべきは、柔道の技の合理性、美しさが、多くの日本選手によって桜舞台で実現され、映像を通して全世界に発信されたことである。

この流れが世界中を刺激し、すばらしい技の応酬が見るものを離さない柔道になることを願いつつ報告を終えたい。

メダル獲得国

メダル獲得国 (男子)

	金	銀	銅	計
日本	3	1	0	4
韓国	1	1	1	3
ギリシャ	1	0	0	1
グルジョア	1	1	0	2
ベラルーシ	1	0	0	1
ロシア	0	2	2	4
ウクライナ	0	1	0	1
スロバキア	0	1	0	1
ドイツ	0	0	1	1
オランダ	0	0	2	2
ブラジル	0	0	2	2
キューバ	0	0	1	1
モンゴル	0	0	1	1
ブルガリア	0	0	1	1
イスラエル	0	0	1	1
アメリカ	0	0	1	1
エストニア	0	0	1	1
計	7	7	14	28

(女子)

	金	銀	銅	計
日本	5	1	0	6
中国	1	1	3	5
ドイツ	1	0	2	3
キューバ	0	1	4	5
オランダ	0	1	1	2
フランス	0	1	0	1
北朝鮮	0	1	0	1
オーストリア	0	1	0	1
ロシア	0	0	1	1
ベルギー	0	0	1	1
スロベニア	0	0	1	1
イタリア	0	0	1	1
計	7	7	14	28

メダル獲得国数

1988年	ソウル 男子のみ	15
1992年	バルセロナ 男女	20
1996年	アトランタ 男女	17
2000年	シドニー 男女	25
2004年	アテネ 男女	24